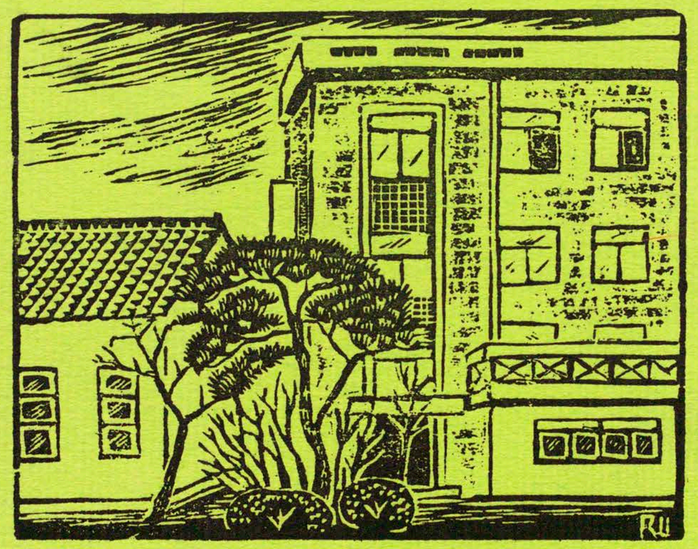
ひめまつ



23

宇都宮短期大学附属高等学校生徒会

ひめまつ 第二十三号 目次

表紙・扉……佐伯留守夫　題字……石川木魚　校歌・写真

「巻頭言」めざましい躍進の年……学校長 須賀友正…1

「特集」校名変更をこう考える……北条 静男・大塚虎之助・高山 源吉・山本 康・福田アキノ・大島喜代子……2

詩

……斎藤正子・高橋万里子・柳谷貴子・野路利江・藤井マキ子・斉藤享久・阿部克巳・中野正子・斉藤冷子・荒牧幸子……11

全生徒の会にしたい（新生徒会長に就任して）……高山三雪……19

少なかつた建設的発言（生徒会一年の足跡を顧みて）……米田正子……20

随想「高校生活の多様化」……副校長 須賀淳……22

▽各科の特色…家政科・普通科・商業科・音楽科……24

母子通信　電車の中にもお母さま……大関幸子

心に音楽、本を持ちなさい……大関浩子……31

特別寄稿　道鏡塚（短歌）……井上悠逸……33

草しずか（俳句）……手塚武……66

＝弁論大会入賞者の論旨集＝……34

文明人ほど目が見えない……阿久津恵子

法の盲点……米田正子

傍若無人の時代……渡辺茂子

幸福について……細谷啓子

高校生とは……川上真知子

人種差別……西村裕子

卒業生の残したことば……40

短歌……44　俳句……63

「職員寄席」須賀淳・伊沢雪夫・淡路哲昭・廻谷和子・井岡寿子・渡辺欣子・寺門彬・松沼光昭・斎藤辰雄・手塚武……47

わたしは期待している……PTA常任委員 日向野一……54

夏休みの読書から……55

女の一生を読んで……安生美津江

アンナ・カレニナについて……柳谷貴子

アンネの日記……加藤洋子

「狭き門」の感想……湯沢美知子

若きウエルテルの悩みを読んで……大橋キイ

「ひも」を読んで……大垣秀子

「かけ」を読んで……青木みよ子

「もの言い」を読んで……篠原カツ子

「大地」を読んで……石田八重子

私たちの見た先生……中里寿美子・橋本治子・上野信子・二年六組・塙マリ子・佐山ゆき・高橋万里子・山越春美・神長美代子・江田米子……67

音楽教室……作詞作曲—高山康代・野沢文子・平野美枝子……72

特集・校内ニュースより…放送コンテスト・合唱コンクール・生徒会役員選挙・鹿沼学友会・石橋学友会の活躍……74

各科・わしらが誇り……77

クラブ活動・この一年……84

昭和四十三年度学校行事……96

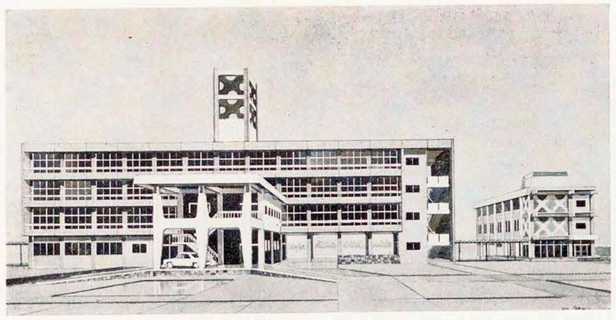
生徒会役員一覧……98

昭和四十三年度就職状況一覧……99

昭和四十三年度進学希望者調べ……96

職員住所録……101

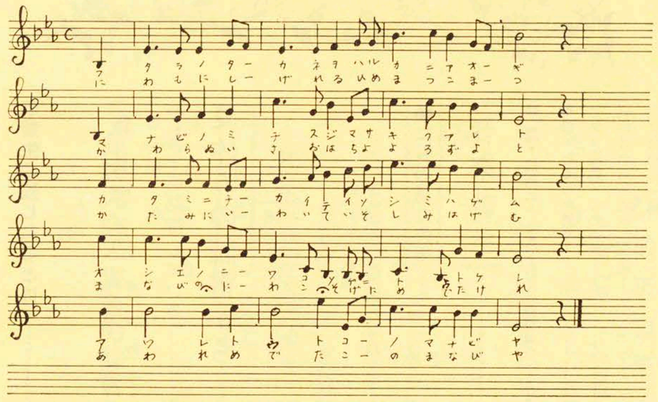
◇編集後記……103



家政科特別教室を中心につくられる豪華な新館
（昭和四十四年十月完成予定）

校名を“宇都宮短大附属高校”と改め明日の飛躍を語りあう

校歌



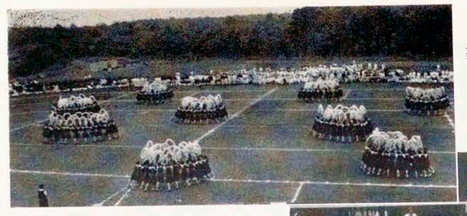
宇都宮短期大学附属高等学校校歌

一

二荒の高嶺を　遥かに仰ぎ
学びの道筋　まさきくあれと
かたみに誓いて　いそしみ励む
教えの庭こそ　げに尊けれ
あわれ尊　この学びや

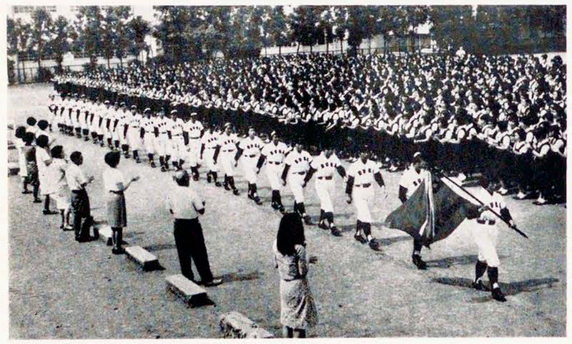
二

庭面に茂れる　姫松小松
変らぬ操は　千代万代と
かたみに祝いて　いそしみ励む
学びの庭こそ　げに芽出度けれ
あわれ芽出度　この学びや



華やかに開幕された
校名変更記念大運動会

関東大会に出場活躍するバレー
部の雄姿（平塚市にて）



盛大な壮行会！
ソフト部全国制覇へ

石橋湛山杯争奪
日本高等学校弁論大会

すさまじい闘魂!!
（校内球技大会）

熱弁を振う阿久津弁論部長

生徒会

この１年のあゆみから

生　徒　総　会（本年の活動方針決定）

老人の日の贈り物の整理中

小さな親切運動も
活　発　に！

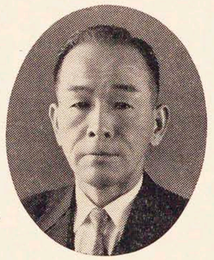
コーラス部桔梗寮慰問の一コマ

風紀委員も安全登校に一役……

めざましい躍進の年

—創立七十周年を前にして—

学校長　須賀友正



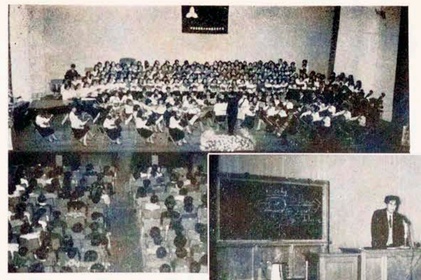
大寒に入ってから毎日あたたかい日がつづく。暖冬といわれたこの冬も、暮から松の内にかけては、さすがに凛烈といっていいほどのきびしい寒さをもたらしてきた。大寒といえば文字通りきびしくあるべき凍てが、ゆるんでしまうとは、何となく拍手抜けの感がないではないが、何んにしても、この日射しはあの暖かい春の訪れを早くも予感させるものとして心楽しい。

学園としても、入学試験、卒業式、入学式とこれから大きい行事に次々と対処して行かねばならないが、昨年七月には文部省初等教育課長をしていた長男淳が官を辞して本校副校長に就任し、本校の経営に専念することになったので、私としても心強く、任せられることはできる限り任せて、大いにやってもらいたいものだと思っている。

たまたま来年は創立七十周年にも当たるので、その記念事業の一つとして懸案の本館の新築を今年中に完成させることにするがそれに先立ち、去る九月一日をもって校名を宇都宮短期大学附属高等学校と変更し、高等学校を、家政科、普通科、商業科、音楽科の四科を有する総合高等学校にふさわしい校名にチェンジし、あわせて短期大学をも広く一般の方々に知っていただこうと念願したのであるが、幸いに各方面の御理解を得、短期間にかなり浸透しえたことはまことに喜ばしい。また内容的にも検討を加え、新年度から家政科、商業科を多様化し、専門的技能をより深く習得することができるようにした外、食物専攻生には調理士の資格が得られるように配慮した。教授陣は各科共にそれぞれ優秀な人材を擁し、親切で人間味豊かな全人教育を目指しているので、施設の充実と相まって一大飛躍が期し得られよう。

クラブの活躍も際立っており、ソフトボール全国第三位、弁論部は各種大会に出場、全国第三位、書道は県下「最優秀」に入賞した外バスケット、バレー、放送、音楽、演劇部等の活躍も目ざましく、また学友会各支部、クラス単位の社会福祉施設の慰問、地域社会への奉仕活動等も活発に行なわれたことを特筆して感謝の意を表したい。

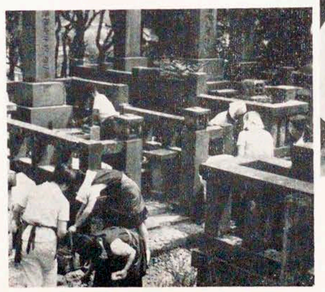
三年生の皆さんには、健康に留意し、後輩の為めによりよい道を拓くよう、今後のご活躍に期待したい。



好評を博した第六回定期演奏会（栃木会館にて）

評論家堀秀彦氏の人生論をきく（講堂にて）

お茶のけいこ（礼法室にて）



命日の年中行事栄子先生の墓地清掃

表情にも真剣味あふれる（調理室にて）

特集

校名変更をこう考える

校名変更は時宜を得たもの

—総合高校の実態を知らせる好機—

宇都宮市立陽北中学校長　北条静男

宇都宮須賀高校から宇都宮短大附属高校へ——今度の校名変更は現在の須賀学園の真の姿を一般社会の人たちに正しく認識してもらう上に、大きいプラスとなったと思う。

高等学校とは言っても、明治時代の裁縫女学校のイメージがなかなか根深く残っており、同校が近代化された家政科を中心に、普通科、商業科、まして全国にも余り類のない、時代の先端を行く音楽科までも有する総合高等学校で、生徒の数も二千人におよんでいる現状は、一般にあまり知られていない向きがある。

したがって、宇都宮短期大学とあわせて高等学校をも同時に一般父兄に知らせ、かつ高度にレベル・アップされている附属高等学校の実態を理解してもらうためには、校名変更はまことに時宜を得たものと思われる。

大学の方も、現在の音楽科に加えて、近い将来に家政科をはじめいくつもの学科が併設されるとのことなので。宇都宮市内はもとより、県内各高校の進学希望者が、手近に進学の機会を得ることが出来るので、私はその早期実現を大いに期待している。

また創立七十周年を期して、特別教室を中心とする大規模な本館の新築、専門技術の習得を徹底する学科の多様化、人間性豊かな教育方針の徹底など、時代の進運に適応した姿勢をととのえつつある御努力に対し、心から敬意を表するとともに、益々ご発展をお祈りしたい。

全学園一丸となって前進しよう

PTA会長　大塚虎之助

長いこと本校PTAの会長をつとめて来た私は、学校との接触が特に深い関係もあって呼びなれた名称と別れるのは、いささか心残りもないではなかったが、校長、副校長から短大との関連性、二千名の生徒を有する総合高校として躍進をつづけている現状と、創立七十周年を記念して、さらに新たな構想の下に、一大飛躍を試みようとする熱意にあふれた御高見を拝聴するにおよんで、このたびの校名変更には双手を上げて賛成した次第である。

校名変更と同時に新年度には特別教室を中心とする本館の造営、教育内容の充実が打ち出されているが、今後はこれらのことが、人間味豊かな、親切な教育をモットーとし、かつ実践している本校に加味されることになるのであるから、在校生はもとより、続く後輩たちのしあわせ、恩恵は、計り知れないものがあると思われる。

連絡の必要上私は度々学校を訪れるが、先生たちが、家庭訪問や校外補導によく活躍されているのには驚きかつ敬服している。

校内生活も明るく、礼儀作法がきちんとしており、私たち外来者に対しても会釈や目礼がよく徹底している。また登下校時校門のところで学校に礼をしてゆく生徒を見かけたので聞いてみたところ、「私たちのクラスで自発的にやっているんです。」とのことであった。毎日自分たちのお世話になる学校という畏敬すべきものに対する感謝のしるしなのだと答えてくれた。

私の娘たちもみな立派に仕上げていただいた。ほんとうに何も出来なかった生徒たちが三年間でどこへ出しても間に合う「一人前の人間」に仕上がる——までには、一般公立の先生方等にくらべると恐らく数倍のご努力が傾注されているのだと思う。

私は時折り生徒たちに「よく聞き、よく調べ、よく習う。習ったら覚える。覚えたら実行しなさい。」と話しているが、やる気を出すことだ。幸いみなよく分かってもらえるので嬉しい。

副校長淳先生の着任、校名変更、教育内容の充実、七十周年記念事業の展開に基づく飛躍的発展など、明るい話題ぞろいの本学園はこの好機をのがさず、同窓会員、父兄をふくめた全学園をあげて、本校の発展のため一丸となって前進しようではありませんか。

高校から大学への一貫経営

PTA副会長　高山源吉

宇都宮短期大学附属高等学校が誕生したことは、宇都宮は勿論のこと、広く県内の教育界に大きな話題をなげかけたと同時に、教育関係者に少なからぬショックとなったことは事実である。

このことは、ただに永い伝統をもった須賀高校が、大学附属高校といういわばカッコイイ現代的な名称に変わったという表面的な事件であるだけでなく、学校経営者の理想であるところの、高校から大学への一貫経営という、高く大きい標点に対し、早くも須賀学園が到達して、校名変更という手段をもって、その旗色を解明にしたことである。

高校経営もさることながら、大学建設ともなると、巨大な経費を必要とすることは当然のこと、その運営についても教授の編成をはじめとして、高度な教育技術の導入など、我々外部の者がはかり知れない問題を解決しなければならないのであって、これらの重要な課題を解決して、宇都宮短期大学の経営に踏み切った学校法人須賀学園が、今後更に大学の運営計画の充実を前提として、今回高校名を変更して人心の一新をはかったことは、校長須賀友正先生の卓越

校名変更は、創立七十周年を前にして、一大飛躍を試みようとする本校の決意の現われでもあるが関係者はこれをどう見るか、北条校長をはじめPTA会長、同窓会長、在校生達の意見を聞いてみた。

—編集部—

した抱負と経綸のしからしめるところであって、深く感銘させられるところである。

時あたかも、文部省初等教育課長として、その高い識見と豊かな人間性が高く評価されて、近い将来の大成が期待されていた校長の御長男である淳先生が、その高い地位を敢て辞された上、本校副校長として就任されたことは、父祖三代に亘って栃木県教育界の空高く燃え続ける須賀学園の火が、いよいよ古くゆかしい伝統の上に、新しく豊かなエネルギーを爆発させて、その炎は天に沖する栄光を約束するものである。学校法人須賀学園の理想と情熱の巨火よ永遠なれ〃。

三人の卒業生の父として

PTA結城支部顧問　山本　康

私は三人の娘たちを次々と本校へ送り込んだ父親として、この度の校名変更に対する感慨はひとしお深いものをおぼえる。三人とも皆旧校名、いわゆる「須賀サン」の卒業生だからである。

親しんだその名と別れるのだから、私自身もさびしい気がするがそれ以上に校長先生がさびしいのではないかと思っていたが、お話をうかがってみたところ、時代と共に歩むのが当然と割り切っておられたので、さすがはと敬服した次第である。

長女をどの学校へ入れようかと迷った私は、茨城、埼玉、栃木三県下でどこが一番いいか、実地に当って見て研究して歩いたものである。その揚句ここと決めたのが言うまでもなく宇都宮須賀高等学校だったのである。

あんなに迷った私がどうして本校を選んだのか？　しかも結城市におりながら宇都宮という遠隔の都市にある――。

お世辞でも何でもなく、校長先生のご人格に敬服したこと、第一にこれである。女子教育に捧げる熱意、栄子先生以来の伝統と歴史の上にきずき上げられた充実した設備、そして親切をモットーとした行き届いた指導など、将来家庭婦人として一家の主柱となる女子をお預けするのはこの学校をおいて外にはないと私には考えられたのであった。

期待通りの長女の成育に感激した私は二女三女と次々にお願いし三女は昨年卒業して現在は地元の農業協同組合に勤めているが、じ来校長先生への年頭のご挨拶は欠かしたことがない。

昨年七月からは長男淳先生が文部省を辞して副校長に着任、校名変更、家政科、商業科の多様化、新校舎の造営など、新方針を次々と打出していられることは、今度の校名変更が単なる校名変更に止まらず、内容的にも全面的な飛躍の態勢を整えつつあるものとして私たちは、心から賛成し期待しかつ敬意を表するものである。

これを機会に本校の益々発展されんことを三人の娘たちはもちろんのこと、家内ともどもお祈りする次第である。

進もう、自信と誇りをもって

同窓会会長　福田アキノ

七十周年記念の式典を前にして、私たち同窓会といたしましては微力を尽くして御協力申し上げたいと存じ、昨年来数度の有志会を

持ち、種々協議しました結果、戦時中供出してしまったままになっている創立者栄子先生の胸像を寄贈したいということに決まりました。いずれ総会を開いて、正式に決め、来年の式典までには立派に完成させたいものと念願いたしております。

それに先立ち、本校では昨年九月一日をもって、長い間呼び慣れ親しんできた「須賀高」とお別れして「宇短大附属高」となったことはまったく画期的な英断であり、校長先生が、高校から大学への一貫経営の理想実現に向かって、大きくふみ出したものと信じます。

近い将来には大学に家政科、経済科、文学科などの新しい科が併設され、本校が本県教育文化の推進力として発展してゆくことを、私たち同窓会として心から期待してやみません。

私たちのいちばん嬉しいことは、最近の卒業生が社会の各方面に進出して、めざましい活躍をつづけていること、そして一段と評価を高めていることです。就職率はもちろん一〇〇%。家政科、普通科の卒業生も商業科と同様、いちじるしい好成績をおさめているとのこと。後につゞく在校生の皆さまは、自信と誇りをもって、ますます本校の真価を一般社会人に認識していただくよう、一日一日を大切にし、努力精励して、人間性豊かな人になってほしいと切に希望します。

光茫を放つ〃附属高校〃

三年　大島喜代子

創立七〇年の歴史に基づく伝統ある須賀学園が九月一日付で宇都宮短期大学附属高等学校と校名変更になり新たな気持ちで、先生初め生徒二千余名が毎日、努力しています。しかし伝統ある須賀高校が内外共に飛躍をめざし変化していくことは、卒業生などには、一種のノスタルジヤをよび起こすもとにもなっているように思われます。近代的な校名は若い私達には「かっこいい」響きであり、特に中で生活する私達二千余名の意気込みをあらわしている校名だと思います。昔の須賀高はソフトボールが強かったと世間の方からは準優勝を惜しまれておりますが、むしろ私は、時代の波に合わせて華々しい入賞を飾っている多くの文化活動に注目してもらいたいと思うのです。音楽科を初め、弁論部の全国大会出場入賞、書道、演劇、放送と、どれをとってもすべて県立私立の他校に優る成績をおさめている現在、附属高校の校名はますます光を放ち、誇りを持って呼ばれるのにふさわしいと思うのは私だけではないでしょう。ただ本校は元来、地味な校風があり、誇張したり、宣伝機関など利用するのが少いので、外部にはそのままの良さが理解されず消極的な感じでうけとめられているという事は残念です。やはり現代は主張すべき点は遠慮せず表面に出すべきではないでしょうか。

就職率一二〇%の実績をおさめる進路決定状況も（在校生では求人に応じきれず、既卒者までも求めてくる）商業科の充実した内容もどちらかといえばまだ十分知られているとはいえないようです。しかし社会の第一線で活躍している諸先輩は各方面で着実にその力を認めさせる仕事をなし、本校に指名で求人する会社は年々ふえているのです。七十年の歴史と伝統をうけつぎ発展に努力する私達は日々の教えを〃一人は一校を代表する〃の生活目標に置き、一団となって明日への歩みを力強く踏み固めております。校名の変更が一大飛躍を名実共にあらわしていく事を私は自信と誇りをもって見守

っていきたいと考えているのです。

野原を駆けてみたい心もち

三年　直　井　研　二

今の私は春浅い野にひょっこり現われた新芽の様な心もちである。野は一面私の様な仲間でいっぱい、それに彼女自身もつい先日までの老いた姿を見せてはいない。彼女にとって、この春の訪れに似たものは――その影響に強弱があるにしても――幾度かあったはずだ。が、彼女も私もすべて新しいものから出発する様な気もちでいる。こういう状態が自然に私の中に新しい何ものかを植えつけてくれる。それの成長してゆく音が聞こえてくる。無条件に嬉しさらしいものが湧き出てくるのである。

反面、七十年の歴史が一夜にして崩れ朽ちてしまいそうな、何か堪えがたい悲しみを起こさないわけでもない。でも、これは私の中にある頑固な保守心の仕業であって、歴史は崩さずにその上に築き上げてゆける、ということにただ反抗しているにすぎない。が、そんな気もちも、新しさということを切に感じている今の私には、全く取り除かれている。

私はこの春の中にあって、足を踏みならし、大声で叫び、野原を駆けてみたい気がする。

春の訪れ！

すがすがしい空気の中に、再び芽を出した若木と、それを養って ゆく大地の足音とが、ほら、聞こえてくるではないか。

聞こえてくるではないか。

私達がしっかりすることだ

三年　小　久　保　秀　子

私は二年前、宇都宮短期大学が創立された時に友人達と「附属高になるといいね。」などと話し合ったことがあった。私はそれを希望していた。なぜだろう。かっこがいいからか、聞こえがいいからか、良くわからない。

でも先生方が良く言われたこと校名変更に伴い本館も新築する、だが校名、校舎がいくら新しくなってもその伝統ある学校に学ぶ生徒私たちがしっかりしなければだめだということが実感としてわかってきた。本当にそうだと思う。私達三年生は卒業してしまうが後に残る一、二年生、新入生は新しい心構えで成長していただきたい。校名変更と同時に、この進んだ新しい時代、社会に全体で突入していきたいものだ。校名変更は校舎も新しく完成すればもっともっと実感がわいてくるのではないだろうか。

いっだったか忘れてしまったが、ある時バスの中で、ある中学の時の友に会い「宇都宮短大ってあなたたちの学校の短大なの。」と聞かれたことがあった。このような点でも短大と高校の名が同一になったこと、これは大きな発展ではないでしょうか。

今までは「スカさん」などと言われ何度もいやな目に会いましたが、これから先はこんな言葉も少しずつ消え、完全になくなるのではないでしょうか。又校名を聞いただけでも市街地のセンスある学校に聞こえるらしい。

いずれにせよ私は校名変更は学校に対し、又私達自身に対しても

大いにプラスになったのではないかと思います。

ファイトがからだ中に湧いてくる

二年　永　島　睦　子

ただ名前が変わっただけなのに、何か以前より精神的に伸び伸びとしたような気がしますが、高等学校の一生徒であるという責任感は倍にも感じます。

毎日の生活も、今までより、ずっと責任を持ってやらなければいけないし、附属高の生徒として恥ずかしくない生徒になりたいと思うようになりました。

友達にも、「名前変わってステキネ」と言われると、何かファイトが体中にわいて来ます。まだ名前が変わっただけなのに、今までの自分より立派に、自信と希望を持とうと思う気持ちが強くなり、新しい校名を、学校を生かすも、殺すも自分の行動ひとつで決まってしまうような緊張をおぼえます。これを機会に、学校の外見も内容も、生徒もみんな変わっていくと思います。

七十年の歴史の上に、また新しい附属高の歴史が積みかさねられます。その歴史は私達が作って行くのです。今までよりスケールが倍にも大きくなったように思います。毎日々々の生活が充実したような感じです。

世の中に学校は、たくさんありますが、四つの科があり、自分の個性を自由に伸ばせる学校は数少いと思います。ただ私はこの名前に圧倒されてしまってはならないと思います。

私達は附属高の生徒としてますます自信を強め、誇りをもって学園生活を送ろうではありませんか。

校名変更は学園の発展

二年　留　置　博　子

宇都宮短期大学が創立されてまもないころ、私は友達と何気なくこんなこと言ったのを覚えている。「私たちの学校が宇都宮短期大学附属高校という名前に変ったらいいね。」と言ったことを。このことはきっと他の生徒たちも言っていたことだろうと思う。

昨年の夏休みの頃校名が変わると聞いた時信じられなかった。先生から校名変更について賛成かどうか聞かれた時、私たちはもちろん喜こんで賛成した。九月一日から正式に変更になったのだが私はちょうどその日の帰りのバスの中で、どこかのおじさんに、学校の名前を聞かれた。私は「須賀高です」「宇都宮短大附属高校です」のどっちの名前で答えようか迷った。もちろん宇短大附属高と答えたがその時は言い慣れないのでちょっとテレくさい気持ちがした。そのおじさんは聞いたことない学校だなあというような顔をしていた。それからも何回となく近所の人や家に来る人に学校を聞かれたが「宇短大附属高校」といったあとで「もとの須賀高です」と言わなければならない。でも須賀高という校名はいつまでも残ってもよいと考えることもある。たくさんの私たちの先輩が築き上げたこの須賀高が宇短大附属高校に校名は変更されたからといって、すぐ消

えるはずがない。そう考える時やっぱり須賀高という校名を変えないほうがよかったと思うこともある。しかし宇都宮短期大学附属高校と改名されたことは須賀学園が発展したことなのだ。たくさんの先輩の築き上げたこの学園を基盤に、内容も充実させ、より一層この須賀学園を一人々々が自覚し協力しあい発展させるのが今の私たちの役目だと思う。

校門の出入りには必ず礼を

一年　宇賀神文子

第二学期の始業式に当たり、校長先生の感銘深い御訓示をいただき、諸先生はもとより、私達全校生が、宇都宮短期大学附属高等学校への、新たな決意と希望に、情熱を燃やしたことと思います。ここで私は、この気持ちをいつまでも失うことなく、前進を続けていってもらいたいと思うのです。

これまで七十年の歴史の中には、激しい風の日も雪の日もあったことと思います。これら幾多の困難をのりこえた体験が、今日の立派な学校を築き上げたのです。

私達は。これらの先輩の努力のあとをよく考えて一人々々が、もっと自分を大切にしなければなりません。自分を大切にすれば軽はずみな行動は出来ないはずですし、すなわち「一人は一校を代表」していることになるのです。校名が変ったことによって、世間の目は今までより、私達の学校に関心をよせるでしょうし、一層きびしく私達の行動の上に、むけられていることと思います。

かりに一人が不正な行動をしますと、世間の人は「なあんだ、学校名が変わっても生徒は駄目じゃないか」とかえって、けいべつの眼を注ぐことでしょう。

この様な訳ですから、今、この時が私達にとって一番大切な時なのです。天下分け目の重大時にあるのです。

その決意のあらわれとして、学校の門を出入りする際に、姿勢を正し、必ず礼をすることにきめたらよいのではないかと思います。厳粛な、そして私達の修養の道場である学校に対して、朝は精神を統一し、夕は今日一日に感謝するこの気持ちが、一人は一校を代表するような、本校の精神を具現することになるのだと思います。

その上で私達は、生徒の本分である学習に精を出し、家政科、普通科、商業科、音楽科それぞれの特技を大いに発揮すべきであると思います。とかく私達の学習は受け身の状態が多く、先生から教えられるのを、待っている傾向があるのではないでしょうか。先生に教えられる前に、私達は常に学びとろうという気持がなければ、新しい学校の名にふさわしい生徒となることは、おそらく不可能でしょう。

皆さん。学習だけではありません。

課外のクラブ活動においてももちろんそうです。「積極性をもつこと」これは本校生徒全般において、心がけなければならないことではないでしょうか。

さあ皆さん。ここでもう一度、あの日の決意を呼びもどして下さい。

そして全校一丸となり、よりよき学園づくりに情熱を燃やそうではありませんか。

学校の好さが本当にわかった

三年　遠藤洋子

七十年も続いてきた現在、どうしてここで名前を改めなければならなかったのだろうか。それはいうまでもなく学校がより以上発展する為だ。しかし今までどうりの名前でもよかったのではないだろうか。

ただ名前が変わったというだけではいけない。その名にふさわしい学校にならなければならない。こんな偉そうなことを言っている私でも、入学当時は「スカさん」という馬鹿にしたような呼び名でいわれることがいやでたまらなかった。見知らぬ人や、知人にどこの学校かと、問われて笑ってごまかす人もいれば、うそをつく人も少なくはないだろう。果たして何人が自信をもって自分達の学校名を言えただろうか。

だが、今の私は違う。誰に聞かれようとも「須賀高校です」とはっきりと言い切れる。何故って、この学校にきて、本当に好かったと思っているからである。この学校の好さが本当に分かっていない人達が可哀想でもあり、腹が立つような気持ちである。——どうしてこの内容の充実した、親切な教育をしてくれる礼儀作法の正しい本校の好さが分からないのかと。

名前が変わった以上、世間の人達がどう言おうと、私たちは、私たちの学校を、一日も早くよりよい学校にし、世間の人達を見直させるような学校にしたい。そして、この学校の真価が一般社会人に知られ、これからも隆々発展していくことを望む一人である。

にがい話、うれしい話

二年　阿部恒子

校名変更は一大革命であった。この革命は私達先徒に多くの希望と可能性を抱かせたに相違ない。先生及び全生徒が九月一日をもって宇都宮短期大学附属高の一人となったのである。私はこの校名変更により、人々がこの高校を以前よりさらに前進、発展した高校として見てくれることが望みであった。でも、その望みはすぐ私の心からふきけされたのである。なぜなら、人々はまだ革命のおきたことを耳にしてなかったからである。これは、私が体験した例であるが、バスの中で、婦人に「貴女はどこの生徒さんですか」と聞かれた。私は胸をはり、「附属高です」と答えたのである。すると婦人から思いもよらぬ返事が返ってきたのである。婦人は少し驚いた顔で「どこの生徒さん」とまた聞かれたのである。私はしかたなく小さく「須賀高です」と答えると、「須賀さん」と婦人はあっけなく言うのである。これは私にとってはショックであった。ある人は、こうも言う「宇都宮短期大学附属高は宇都宮にあったかな」などと。私はこんなことがあって以来、がっかりしていた。先生から名に恥じぬようがんばることと聞いたのであるが、この分では、まだまだ望みないと思われた。

でもある時はこんなこともあったりしたのでずいぶん私の気持ちは救われたものである。それは学校帰り、買物かごを手にさげた婦

人が、話しかけてきたのである。婦人は「すみません、今年は須賀高は文化祭やらないのですか」とていねいに聞いてきた。婦人はその後に「須賀高の文化祭は安いし良い展示品があるし……ああこんど附属高でしたわね」とこうも言ったのである。私は気持ちよくその質問に答えた。「今年は体育祭をやったので、たぶん文化祭はやらないんじゃないですか」と言ったのである。婦人は礼を言い背をむけ走って行った。私はこの時ほどこの高校がりっぱに見えたことはなかった。そしてうれしかった。私の方が婦人に礼を言いたかったくらいだった。これからの我が校はわれわれの手で益々発展させて行かねばならない。

これから私は、せいいっぱいの高校生活を楽しく、悔いのないものとして行きたい。

たとえ校名は変わっても、「一人は一校を代表する」この一言はかわらないのだから。

心から尊敬し愛している学校

三年　上野エッ子

校名改称にあたっては、在校生や卒業生など多数の人の意見を聞くなどして、結局は改称に至った訳だが、いざ改称となると、この須賀高という名が今まで以上にすばらしく見え、私は淋しさと未練がましさとでこの文ではとても現わすことのできない気持ちにかられた。これは私だけでなく、誰しもがそうであった事と思う。この偉大なる須賀高は、運動、文化面はもちろんのこと、様々な実績で全国に知られている。それなのに改称とは……。本当に淋しい。でもこの改称を記念して、この偉大なる須賀高、いや短大附属高が、新しい方針のもとに、今まで以上に発展するのなら、淋しいけれど本当に嬉しいことだと思います。

私はこの須賀高ほど良い学校はないと思い、心から尊敬し、又愛している。それは校名変更に至った今日でも同じことである。

私はよく須賀高コンプレックスの話を耳にしたが、自分自身に関する限り、そんなことはまったくなかった。私ははじめから須賀高を希望し、入ってみて、やっぱりよかった！と思っている一人である。

愛情がすみずみまでとおっている学校、親切な指導、安心して勉強のできる学校、あたたかい友情など、好い面は、ふだんは見失われ勝ちで、不満や不平が先き立ちがちなのだが、私の場合、自分に反省すべきことが多いだけで、この学園生活三年間は、ほんとうに楽しかったと思う。

希望するところに就職のきまったのも学校のおかげである。こまかい心づかいが、これらの進路指導にも感じられた。

私はやがて本校を巣立って行くが、短大附属高卒業生として、胸を張って堂々と社会生活を送り、よき先輩と呼ばれたいと願っている。

詩

雪が降る時

三年　斎藤正子

雪が降る時町は静かだ
雪の落ちる音しか聞こえない
しんしんと
雪が降る時は目をとじる
雪が町を化粧していくからだ
しんしんと
雪が降る時町は祈る
雪が一日も早く消える日を
しんしんと
雪が降る時町は喜ぶ
雪が人々の心を消してしまうから
しんしんと
雪が降る時私は願う
雪がいつまでも私の友である様にと

戦争

三年　高橋万里子

祖国の土は嘆いている。
祖国の土は血をきらっている。
戦争という悲惨な事実を
人々は何を考えているのか。
若人の血が流され
遺体が積まれ
人々は悲しみと苦しみとを
背負って生きている。
憎しみに燃えた顔には
あきらめの色さえもある。
子を亡くし　親を失い
兄弟を亡くし
涙も乾ききって……
陸からも空からも攻撃され
せっかく作った作物は
荒らされて
食べる物なく
ひもじい思いをして……
虫けらのような扱いを受けても
それでも人々は生きたいと願い
生き続ける。